

## 〔国際会議報告〕

## 第10回アジア流体力学会議参加報告

\*名古屋工業大学大学院機能工学専攻 牛島達夫†

もう随分前のことになってしまいましたが、先日開催された第10回アジア流体力学会議の様子について報告します。第10回アジア流体力学会議はスリランカの旧王朝の首都があったキャンディの郊外にあるペラデニア大学工学部で2004年5月17日から21日まで開催されました。ペラデニア大学はスリランカで最優秀の大学でまた、工学部にもかかわらず多くの女学生を見つけました。会議には欧米を含む、アジア各国19カ国から215名の研究者が集まりました。参加国では日本とインドが29名で最も多く、次に開催国のスリランカの26名でした。開会式典では、スリランカの名誉文部大臣、日本大使館の代表などが祝辞を述べるために招かれており、国としても学会を積極的に後援しているようでした。スリランカの名誉文部大臣の祝辞は約30分とかなり長いもので私は途中で多少言葉の問題もあって退屈してしまいましたが、スリランカのような開発途上国では技術者や学者の海外流出が深刻な問題であることと先進国の技術をそのままこちらに技術移転しても役に立たないことが多いこと、その地域のニーズに合った技術とそれを開発援用する技術者が必要であることを切々と説いておられました。

さて、私は今回の学会で発表が第一日目だったため、その日のホテルの夕食で福西先生から学会の報告書を「ながれ」に投稿するように依頼を受けるはめになってしまいました。多くの参加者が学会のバンケットの会場にもなったホテル・トパーズに宿泊していました。名前からもわかるようにこのホテルの頭文字はHT(阪神タイガー

ス)です。ホテルのプールの底に大きく、阪神タイガースのマークが塗られていました。今回、このプールに学会中にお世話になったかたがたも多くいたようです。夜、プールで泳いだ先生は南十字星が見えたとおっしゃっていました。



図1 学会バンケット会場になったホテルのプール

食事は毎食カレーで、基本的に学会会場で昼食を頂き、朝食・夕食はホテルで頂きました。キャンディの下町界隈で食事された先生方によれば、160ルピー(約200円)で何種類ものカレーを腹一杯食べられたそうです。飲料水にはかなりの注意を払い、配布されたペットボトルの水しか飲まなかったのですが、苦しい時代を生き抜いた経験がない若い先生方を中心にお腹の調子を悪くした先生が毎日代わる代わる出ました。私も体調を崩した一人ですが、美味しい料理のおかげで食欲はさほど落ちませんでした。逆に多くの先生方が学会後の体重増を気にされていたようでした。私の腹痛の際に、太田胃散、梅肉エキスをそれぞれ分けてくださった筑波産総研阿部博士、佐藤浩教授夫人にこの場を借りてお礼申し上げます。

学会は5件の招待講演と12件の特別講演が一

\*〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

† E-mail: ushijima@nitech.ac.jp

般講演以外に行われ、アジアおよび欧米の著名な先生方が最新の話題を提供してくださいました。その中で、もっとも印象に残ったハント卿の講演から幾つかの話題：彼はインドで生まれ、幼少時代をさながら Kipling のジャングルブックの世界で過ごしたとのこと。また、2004 年は Prandtl が境界層理論を発表して、丁度 100 年目に当たるということでした。また、乱流の解析の方法の中で、Impulsive method of Vortices というのがあって、これの起源を調べてみるとどうも Dickens の著作にそのような記述があるということでした。昨今、PC での発表が主流の中で、相変わらずの手書きの OHP の発表でそのなかにスリランカの宝石のようにたくさんの輝くアイデアがつまっていて、wit に富む内容のご講演でした。

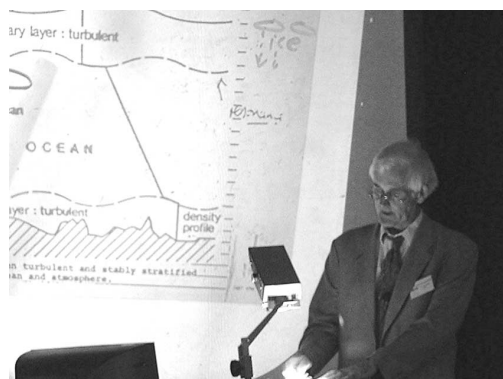


図2 講演中の Hunt 卿

Hunt 先生とは初日にトイレの中で出くわしたわけですが、第二日目の夕方の民族舞踊の公演を待つまでの休み時間で大学の中庭で声をかけて頂き、今年の大学法人化や自分の研究のことから全くとりとめもないことまでお話をすることができ、とても感謝しています。

その他に気がついた他の研究者の発言で、有名な先生の表彰されたときの写真の中の彼が掲げていたビールグラスを評して、流体力学はこのような飲み込んでしまうのは簡単だが理解するのは難しいというコメントが今後の自分の研究を進める上で非常にわかりやすいメッセージとして印象に残りました。

学会中日の水曜日は講演は一切なく、学会側が企画した観光ツアーに参加しました。12 から 15 世紀にかけてスリランカ王朝の都があったポロンナロワに一日掛けて行ってきました。スリランカは日本やイギリスと同じで車は左側通行です。途中、有名な仏教遺跡があるにも関わらず、スリランカの考古学的に重要な灌漑の跡地などをまわるちょっと変てこなツアーでした。帰途、野生の象の群れに遭遇し、バス内は結構大騒ぎでした。スリランカには身近に野生の動物がいます。ただスリランカで林の中を歩くときは注意しましょう。象の大きなうんちが落ちてこちています。ほんとに大きいです。学会会場のペラデニヤ大学ではサルが群れが木々に居り、時折、庭の中で犬などに追っかけられている光景をみました。また、大学の横にある植物園の大木には数え切れないほどの大きな蝙蝠がぶら下がっており、この群れが一斉に急に飛び立った後に雨が降ってくるなどの経験をし、スリランカの人々が自然の中で生活しているのを体験しました。川で水浴びや洗濯をする姿もよく見かけました。人々はとても人懐こく親切でいつも私達を笑顔で迎えてくれました。



図3 バスツアーの休憩中での一コマ：ココナツを飲んでご満悦の望月先生(左)、福西先生

学会のパンケットでインドの代表の方がスリランカはとても美しい国だ。そしてそこに暮らしている人々はそれに見合っていると賛辞を送っていました。

スリランカでは自動車インド製の3輪のタ

クシーと日本製の中古車で通りはごった返しています。私達の学会の送迎のバスも日本製でした。彼らは外見は気にしていないらしく、非常口とか学園とか 村とかそのままロゴが入ったバスが町中を走り回っていました。但し、車が多いせいか町の空気はあまりよくありませんでした。以上、あまり学会の内容には触れませんでした。が、わたしのスリランカ見聞録を終わります。

今回は2年後にマレーシアで第11回の会議が開催されます。時間が許せば、次回も是非参加したいと思います。

謝辞：初稿に目を通して下さった東北大学教授福西祐先生に感謝します。今回の学会参加にあたり、日東学術振興財団より参加費・旅費の補助を受けました。ここに謝意を表します。